

# 大学入試における共通試験改革が

## 高校の教育課程や進学指導に与える影響をめぐる一考察

—首都圏の高校へのインタビュー調査を踏まえて—

中村恵佑・前田圭介・佐藤恵律

How does the reform of the university entrance examination affect the high schools' curricula and counseling for the choice of a university?

: From the interviews with high school teachers in the metropolitan area

Keisuke NAKAMURA, Keisuke MAEDA, Eri SATO

The National Center Test for University Entrance Examinations were abolished in 2020 and the Common Entrance Test (new test) will be introduced in 2021. However, the responses of high school teachers to the introduction of the new test have not been sufficiently clarified. Here we show the impacts of this reform, especially the introduction of four-skills test in English and short-answer questions through the interviews with high school teachers in the metropolitan area.

In high schools that had already implemented the study of the four skills of English and short-answer questions, the changes in curricula and teaching styles due to this reform have remained at a formal level. Furthermore, listening and speaking, which are important in the four skills exams in English, are perceived as difficult to teach and to assess fairly. On the other hand, some high schools regard this reform as an opportunity because the use of private English exams, such as the EIKEN Test, expanded the opportunities for taking the general entrance exam and allowed students to focus more on studying other subjects. Our results demonstrate that the response to this reform varies according to each high school's university admissions.

### 目次

1. 本研究の背景と目的
2. 先行研究の状況と本研究の意義
3. 調査内容の概要
4. 大学入試の共通試験改革の受け止め方と対応
  - 4-1. 形式的な対応
  - 4-2. 指導・評価の公平性と客観性
  - 4-3. 進学指導の方針の変化
5. 結語

### 1. 本研究の背景と目的

「大学入試センター試験」が2020年に廃止され、2021年より「大学入学共通テスト」が新たに大学入試における共通試験として実施される。同テストでは、マーク式問題の改善と共に、英検・TOEFL・GTEC等の民間業者による英語の4技能試験(リーディング、リスニング、スピーキング、ライティング)と、国語・数学の記述式問題が導入される点が大きな特徴だった。しかし、採点における公平性や技術的問題、また経済的・地域間格差等の観点から延期や中止の要望

が強まり、2019 年末、4 技能試験と記述式問題の延期が決定された。一方で、延期決定までは、各高校は 4 技能試験と記述式問題の実施を前提に、教育内容・方法・評価といった教育課程の中で何らかの試験対策を講じていたと考えられる。また、大学入試改革が各高校の進学指導の方針にも影響を与えていた可能性がある。

そこで本研究では、首都圏の高校教員へのインタビュー調査を通じて、大学入学共通テストにおける英語の 4 技能試験と記述式問題の導入に関し、教育課程<sup>1</sup>や進学指導に対して高校教員がどのような受け止めや対応をしていたのか明らかにすることを目的とする。その上で、改革が高校現場に与える影響やその課題を考察する。

なお本稿の執筆は、第 1、2、5 章を中村が、第 3 章を前田が、第 4 章を佐藤と前田が担当した。

## 2. 先行研究の状況と本研究の意義

共通試験改革が高校に及ぼす影響に関して、特に本研究の問題関心に近い先行研究としては、秦野 (2018)、阿部 (2018)、西 (2020) が主なものとして挙げられる。

秦野 (2018) は、文部科学省が全国の中学校・高等学校を対象に行った英語教育改善実施状況調査に基づき、スピーキング対策を取り入れる授業改革が進んでいると説明している。その上で、スピーキング指導における評価の困難さや、4 技能試験への対策に関してはスピーキングの導入を重視しがちであるが、ライティングの指導も検定試験に備えて前倒しで行う必要がある点を指摘している。また、進路指導面での対応として、生徒にいつ、どこで、どの資格・検定試験を受けさせるかを考えるための情報収集（各大学が採用する認定試験とその活用方法など）が必要であると主張している。

阿部 (2018) は、岩手県と秋田県の県立高校教職員に対して、共通試験改革への取組についての質問紙調査を行い、民間の英語の 4 技能試験や記述式問題等に関する各高校での対策状況を調査している。その結果、記述式問題に関しては授業等で何らかの対策を行っている高校が多い一方、英語の 4 技能試験

に関しては、その多くが改革への批判や不安であったことや、具体的な対策を多くの高校が特に行っていないこと等を明らかにしている<sup>2</sup>。

西 (2020) は、全国の高校を対象にした質問紙調査「高大接続改革に関する調査」から、高校が新共通テストをどのように評価しているか、また新テストが高校での学習指導にどのような影響を与えているかといった本稿と同様の関心に基づいた量的調査を行っている。その結果、記述式問題の導入に関しては大学進学率の高い高校ほど否定する割合が増えていた点、英語の 4 技能試験の導入が英語 4 技能の指導の後押しとなると認識している高校が 6 割以上あった点、高校の 6 割以上が授業で出す課題や定期考査で記述や論述の機会を増やす対応をしていた点、進学率が高いほど新共通テストの対応に動く高校の割合が高まる傾向があった点等を明らかにしている。その上で、「新共通テストに込められた『授業改善のメッセージ性』(大学入試センター 2019) は、広範囲に届き、授業の変化を促す一定の効果を持ち得ていたのではないかと。とりわけ、英語教育へのインパクトは大きかった可能性がある」(135 頁)と述べている。一方、今後の研究の課題として「新共通テストの学習指導への影響を調べたが、授業内容の変更にしても、記述・論述の指導や、『英語 4 技能』にしても、その指導内容の方法や内容には踏み込んでいない」(139 頁)と述べ、より詳細な質問紙調査や質的調査の必要性に言及している<sup>3</sup>。

これらの先行研究から、共通試験改革によって教育課程や進学指導に何らかの影響がもたらされている高校が存在することが分かる。しかし、質問紙調査からだけでは、教育課程や進学指導へ具体的にどのような影響がもたらされたかという点は十分明らかにされていない。以上を踏まえ、高校教員へのインタビュー調査によって、共通試験改革が高校の教育課程や進学指導へ及ぼした影響を、教員の認識や進学状況等とも関連付けてより詳細に明らかにできる点が本研究の特色である。また、調査で明らかになった点に基づき、改革が高校現場に与える影響や課題に関する示唆を提示できる点にも本研究の意義がある。

### 3. 調査内容の概要

本研究では、英語の4技能試験や記述式問題、進学指導に関わる首都圏の高校教員を中心に、13校に対してインタビュー調査を依頼した。その結果、3校（X高校、Y高校、Z高校）に承諾いただき、2019年12月から2020年2月にかけて各1時間程度の半構造化インタビューを実施した（インタビュー対象校・対象者の詳細は表3-1、表3-2を、主な質問内容は表3-3を参照）。なお、プライバシーに配慮するため学校名や個人名等は仮名とし、個人が特定されるデータや固有名詞は意味を損なわない範囲で改変している。

まずX高校は、英語教育に力を入れた国際系のコース（以下「国際コース」）を設置している私立女子高校であり、国際コースではネイティブの先生が英語でホームルームを行う等、実践的な英語力の養成に重点を置いている。また、外国籍の生徒の割合が高いことも特徴的である。今回の調査では特に国際コースに焦点を当ててインタビューを行ったが、同コースでは、ほぼ100%の生徒がAO・推薦入試を経て大学へ進学する。そのうち、私立大学への進学が約60%であり、短大や専門学校への進学、海外大学への留学等も一定数存在する。

Y高校は、大学進学率がほぼ100%の公立高校である。Y高校にはスポーツ系の学科も存在するが、今回は普通科に焦点を当ててインタビュー調査を実施した。普通科では、約90%以上の生徒が一般入試を経て大学へ進学する。

Z高校は、私立の女子中高一貫校である。大学進学率はY高校同様ほぼ100%であり、約90%以上の生徒が一般入試を経て大学へ進学する。

なお第4章でも述べる通り、X、Y、Z高校では、改革以前から英語4技能を育成するカリキュラムを導入している。また、Y、Z高校では、改革以前から記述力を育成する指導を行っている。

表3-1 インタビュー対象校の詳細

高校	設置者	生徒	大学進学率	大学受験の形態
X高校	私立	女子校	約100%	ほぼ全員が推薦・AO入試
Y高校	公立	共学校	約100%	約90%以上が一般入試
Z高校	私立	女子校	約100%	約90%以上が一般入試

※X高校はインタビュー対象の国際コース、Y高校は普通科のデータを掲載している。

表3-2 インタビュー対象者の詳細

高校	設置者	教員	性別	備考
X高校	私立	A	男性	副校長
		B	男性	英語科教諭、国際コース長
Y高校	公立	C	男性	英語科教諭、進路指導主任
		D	男性	英語科教諭
Z高校	私立	E	女性	社会科教諭、進路指導部長

表3-3 インタビュー調査の主な質問内容

- ・大学入試の共通試験改革の内容(特に英語の4技能試験と記述式問題の導入)に関する感想
- ・英語の4技能試験や記述式問題に関する、具体的な対策や指導等
- ・教育課程・授業等における変更点
- ・英語の4技能試験や記述式問題の導入に対する生徒の受け止め方
- ・共通試験改革のメリット・デメリット
- ・共通試験改革への対応として意識的に取り組んでいること

### 4. 大学入試の共通試験改革の受け止め方と対応

以下ではインタビュー調査の結果を基に、各高校の教員が大学入試の共通試験改革に伴う影響等をどのように受け止め、それに対してどのような対応を行っているかを明らかにする。なお、データ中の（ ）は筆者により文意を補った部分である。

#### 4-1. 形式的な対応

今回の共通試験改革では、民間業者による英語の4技能試験の導入が大きな焦点となったが、「もともとリスニングもライティングもかなり力を入れてま

すので」[B先生]や、「(英語4技能を)本校ではやっていましたね」[D先生]というように、今回インタビュー調査を行った3校はいずれも、「以前からスピーキングやリスニングを含む英語4技能の学習を取り入れている」という認識を持っていた。しかし、英語の4技能試験の対策を迫られる中で、各校ともカリキュラムや授業内容等に形式的な変化が生じていた。

例えばX高校の国際コースでは、コミュニケーションを重視した英語教育を従来から行っている。そのため、共通試験改革に伴いカリキュラム等を大きく変更した箇所はないが、以下のように受験する民間試験の種類を変更していた。

もう一つそうですね、あとは、今度4領域になったじゃないですか。4技能でしょ。そうすると、TOEICだと2回受けなきゃダメでしょ。お金を払って2回受けなきゃ。要するに、LR(リスニング・リーディング)とSW(スピーキング・ライティング)とお金を払って2回受けますよね。でも英検の方は一回で4技能。一回のお金を払って4技能受けられるんですね。それも変えた一つです。[B先生]

Y高校もX高校と同様に、英語4技能の学習自体は以前から行っていたと認識している。その一方で、共通試験改革に伴いスピーキング指導の形式を変更している。従来のスピーキング指導では、ネイティブの教員との1対1の会話や発表を行っていたが、共通試験改革を踏まえて民間の英語の4技能試験の過去問や、それらの試験と同じ形式のものを活用するようになった。また、発表の方法やライティングの教え方等も変化したと述べている。

ライティングでも、やはり実際のGTECや英検等への対応に効くような書き方などは、多少意識して教えるようになりましたね。前々からもちろんやってはいましたが、題材としてそれに近いものや対応できるものを用意して指導するようになったと

ころはあると思います。[D先生、下線は筆者]

例えば会話の発表形式で、前はスキットをやらせる。皆で自分たちで寸劇みたいに演じる。ところが、それは試験であまり求められてない。そうすると、個別のインタビューに答えて、あるいは絵を見せてそれについて説明するような形式が多いですから、発表のありようが変わる。スキットもなくなったわけではないけど、時間的に(厳しい)。[C先生、下線は筆者]

Z高校は10年以上前から英語の授業では日本語を使用せず、指示も説明も全て英語で行う形態をとっており、スピーキングやコミュニケーション力を重視していた。そのため、「4技能の導入自体には不安を感じていない」[E先生]と認識している。一方で、定期試験でのリスニングの出題等は、民間の英語の4技能試験を意識した形式に変更している。従来は音声で2回放送される形式であったが、民間試験の形式に合わせて1回のみとなった。

また、民間のスピーキング試験では機械に音声を吹き込む形式もある。Z高校ではその形式に慣れるために民間業者が提供するスピーキングプログラムを新たに導入し、年に数回実施している。新たなプログラムの導入はあくまでも試験の形式を「体験」することや、機械に向けて話すことへの心理的障壁をなくすことが目的であり、スピーキング能力の向上を目的としたものではない。そのことは、以下のE先生の語りから窺える。

スピーキングプログラムを3回だけ、体験させてあげよう。「生まれて初めてが本番のテストでした」だと可哀想だから、とりあえず3回導入して、こういう感じなんだ、機械相手にしゃべるってこういうものなんだという。

(筆者:プレテストっぽいよ、まあそこまでじゃない…)

まあそうですね、プレテストというか、トレ



ーニングって感じですね。機械に向けてしゃべるトレーニング。やっぱりね、止まります、皆。「え…ええ」っていうか。「これにしゃべ…しゃべる…？ しかも皆がいる中で、恥ずかしくないですか？」みたいな。本当にこう、しゃべることのノウハウではなく、「この皆がいるところ、え、この、皆でこれ…先生、笑えません？」みたいな。

(筆者：なかなかない状況ですね。)

うん。だからまず心の障壁をとるって感じなんだそうです。英語の先生に言わせると。だから、全員がこうやって (iPad を) 捧げ持って機械に向かって語りかける。[E 先生、下線は筆者]

上記の通り、機械に向けて英語の音声吹き込む行為は生徒にとっては不自然で「笑える」ものであり、本質的な英語 4 技能の向上の機会とは捉えられていない。

ここまで英語の 4 技能試験への対応を中心に考察してきたが、記述式問題の導入に関しても Y 高校と Z 高校は以前から対策を行っているため、授業や学習の方法に変化は生じていないと認識している。そのことは、以下の D 先生、E 先生の語りからも窺える。特に国公立大学を目指す生徒は、国語や数学についても記述式問題の対策を必ず行うため、共通テストへの記述式問題の導入によって授業のあり方が大きく変化したわけではない<sup>4</sup>。

国語と数学については、難関校を目指させているので、国公立含め個別入試、二次試験は記述式がありますので、センターに代わるものとして記述が入るから急に何かを変えるという形ではないですね。センターで全部決まってそれ以上全部受けない、という子はほとんどいませんので。[D 先生]

民間英語の検定と、まあ記述になったところでは、そこで済むのねと。本質ではなくなったな、っていう印象が強かったです。

(筆者：そこで済むと言いますと、例えば記

述式だとか)

基本的に記述式はあの一、国公立を目指せば全員やってますし、校内の試験は全部記述ですから。まあ、対応した形で多少のアレンジはきっとやってくことになるだろうとは思いましたが。自己採点については、ちょっと困ったと思いましたけど。

(筆者：なるほど。まあそれは技術的なところ)

技術的なところはあれだけど。書かせるくらいは別に学校でやってることの方がハードだし、まあ別にやれば、みたいな。[E 先生、下線は筆者]

以上のインタビュー結果より、英語 4 技能や記述式問題の学習を以前から実施していた高校のカリキュラムや授業内容等においては、共通試験改革に伴う変化は、英語の 4 技能試験の種類を変更したり、4 技能試験や記述式問題の試験内容・形態に慣れたるためといった形式的な対応にとどまっていることが分かる<sup>5</sup>。

#### 4-2. 指導・評価の公平性と客観性

第 1 節では、共通試験改革に伴う高校現場の対応が形式的な変化にとどまっていることを指摘したが、「以前から実施していたので、改革されてもされなくてもどちらでも構わない」というニュートラルな捉え方がなされているだけではない。特に英語のリスニングやスピーキングについては、指導・評価が困難なものとして受け止められている。

まず、リスニングやスピーキングの指導の難しさについて、C 先生と D 先生は以下のように述べている。

教える時の「こういう風にやればこういう風に会話力が伸びますよ」という部分も非常に多様ですから、もちろん色んな手法がありますが、一元化できないですね。教授法が非常に難しい。同じ教材でも英語力のある、理解力のある子だと、こういう風にやればいい。だけど、なかなか覚えるのが苦手とか、

あまり得意ではない子には別のやり方が本来あるべきなのに、40人学級ですから、そうした多様な指導を一元的にやるというのが、実は4技能についてはとても難しいところです。〔C先生、下線は筆者〕

(4技能については)やはり教えにくいです。例えば、スピーキングでもリスニングでも、例えば生徒に「こういう風にやりましょう」と指導しても、形として残らない。それを指導するのも難しいですし、彼らが本当に集中しているのか、例えばリスニングでどういう風に取り組んでいるのか見えないんですよね。単語テストのようにテストして「ああ、覚えたな」というのが分かるわけでもないですし。特に40人規模の教室で教えるのに適している内容ではないので、教えるのは非常に難しいし、効率が良いとはなかなか言い難いところがあります。だから、生徒たちが「この大学行きたい」「受かりたい」と言っても、それが身に付くようなスキルアップをさせられるかっていうと、なかなか難しいですね。

それから、グラマー的な部分よりもそういった(リスニングの)部分を強くすると、グラマーが足りなくなる。どうなるかというと、飲み込みが良くて、もう既にある程度文法を理解できてる子はどんどん正しく発音して、どんどんスキルアップできる。ところができない子は、いつまで経っても使えないし、学び直すタイミングがどんどん減らされているわけです。なので、かなり差が広がってってしまうなと感じます。〔D先生、下線は筆者〕

C先生は、リスニングやスピーキングは生徒の学習姿勢や到達度を客観的に確認することが困難な領域であり、生徒によって理解力や進度も多様で個々にあった指導が必要であるため、一斉授業に適した内容ではないと考えている。またD先生は、リスニングの比重を大きくすること<sup>6</sup>で文法の学習が疎か

になることを懸念している。具体的には、「文法を理解している生徒ほど正しい発音ができるようになり、結果としてリスニングやスピーキングの力も身に付いていく」という指導観に基づき、英語学習の基礎である文法の学習時間が減少することにより生徒の理解度の差が拡大してしまう可能性を指摘している。

さらに、スピーキングについては評価の困難さの問題も指摘されている。C先生はスピーキングの成績評価について以下のように述べており、数値化の困難さに言及している。

校内の成績をつける際も、生徒に話させてABCD(評価を)つけることはできますが、これは主観も入りますし、観点によって多様になるわけですね。筆記試験で100点か95点かという差のように、単純な数値化はしにくいところがどうしてもあります。〔C先生、下線は筆者〕

以上の点を踏まえ、Y高校ではスピーキングのテストで点数をつけているものの、英語の成績は従来通り筆記試験の成績を重視してつけている。「やはり、あくまで客観的に(評価しないとイケない)」という点は意識しています。〔D先生〕という語りからも、筆記試験の公平性と客観性に対して信頼を置いており、特にスピーキングについては評価の客観性を揺らがせるものとして認識していることが分かる。

同じくZ高校では、英語の授業内でスピーキングを重視する取り組みは行っているものの、評価の客観性の観点からテストは実施していない。

スピーキングのテストというのはやってませんので、授業中に一対一でしゃべらせて、ペアワークとか何かでしゃべる。それから、挨拶ができればいいってもんじゃないから、何かのテーマについて、例えば携帯を持つことのメリット・デメリットについて会話してみるとか。「何か語るべきものを持たなきゃいけないんだよ」ということは割と低学年のうちからやるように努力はしてる

んですけどまあなかなか身につかないですけどね。[E 先生]

(筆者：難しいところでもんね。)

ただ、まあそういう意識は持って、授業内で先生としゃべる、で、友達同士こうしゃべってみる、っていうことはやってましたので、まあ方向性としてはやっとなあ、それを評価してくれるのかね、ただスピーキングをテストで評価って、誰が何を使ってどうすんだ？っていう。[E 先生]

これらのインタビューより、「成績評価は客観的であるべきであり、スピーキングの評価よりも筆記試験の成績の方がより客観性が担保できる」という考えが共有されていることが分かる。

以上を踏まえると、今回の共通試験改革によって、英語 4 技能の指導・評価における客観性や公平性を担保することの困難さが一層顕在化しているといえる。

#### 4-3. 進学指導の方針の変化

第2節では、Y 高校や Z 高校のような一般入試を受験する生徒の割合が高い進学校における対応を中心に分析し、リスニングやスピーキングといった集団指導に馴染まない内容を指導・評価しなければならない現場の困難さを明らかにした。

その一方で、今回の共通試験改革を好機と捉えている高校も存在する。特に X 高校は、改革を生徒の進学可能性を広げる機会として認識している。

英検に力を入れてます。その英検が推薦・AO 入試でも使えるし、一般入試でも使えるということになってくるわけですから、変わってもらった方が良かったですね。

〔中略〕 私たちが今までやってきたものをこのまま続けて、やってきたものが今まで AO と推薦にしか該当できなかったのが、これが一般入試にも適用できるようになるねっていう話ですよ。[B 先生、下線は筆者]

X 高校では以前から英語の学習に力を入れ、民間の英語の 4 技能試験で一定のスコアを取得することを国際コースの生徒には目標として課していた。一方、試験のスコアが大学入試において活用される機会は、主に推薦・AO 入試に限定されてきたため、ほとんどの生徒が推薦・AO 入試のみを受験していた。

しかし、今回の共通試験改革の中で民間の英語の 4 技能試験の成績を一般入試にも活用する方針が打ち出されたことを受けて、B 先生は「受験戦略次第で一般入試も十分可能になる」という認識を持っている。

私たちが「ああ、これで一般入試も可能だな」という気持ちにはなりませんでしたね。変な話、英語はもう勉強しなくていいわけですからね。6月に例えば準1級とか2級とか取ってしまえば、あとは他の教科を集中すれば良いわけですからね。[B 先生、下線は筆者]

英語の 4 技能試験で一定のスコアを早期に取得できれば、それ以降は他の教科の勉強に集中することが可能になるため、一般受験の合格可能性をより高めることができる。すなわち、英語の 4 技能試験のスコアという資格の活用範囲が拡大されたことで、一般入試への道が拓けたという捉え方をしている。

以上のように共通試験改革を好機と捉える受け止め方は、上位進学校である Y 高校や Z 高校の受け止め方とは対照的である。

#### 5. 結語

本稿では、高校教員へのインタビュー調査を通じて、大学入学共通テストにおける英語の 4 技能試験と記述式問題の導入が、高校の教育課程や進学指導にどのような影響を与えたのかを分析した。その結果、英語 4 技能や記述式問題の学習を改革前から行っていた高校では、改革によるカリキュラムや授業内容等の変化は形式的な対応にとどまっている点や、特に英語 4 技能の指導・評価において客観性や公平

性を担保することの困難さが一層顕在化している点が浮かび上がった。一方、民間の英語の4技能試験が利用されることで受験機会が拡大したり、他の教科の学習により力を入れられるようになったりするという点から、高校側が改革を受験における好機と捉えるという進学指導の変化があった点も明らかとなった。

本調査に基づく以上の知見から、今回の大学入試の共通試験改革が高校現場に与える影響やその課題に関して、次の四点を指摘できる。

一点目に、「形式的な対応」と関わって、民間の英語の4技能試験や記述式問題が導入されることでむしろ高校での授業内容が制約される点を指摘できる。例えば、全国高等学校長協会会長だった宮本は、「高校の英語の授業において従来のように、教科書や教員が作成した教材を使うよりも、民間の資格・検定試験の実施機関が作成した試験対策の参考書や問題集を使っただけの方が有利になるといった風潮が強まり、高等学校における英語教育が変質する危険性が高まることが予想される」(宮本 2018 29頁)という懸念を示していた。そして本調査からは実際に、Y高校で、従来行っていた英語でのスキットや寸劇の代わりに、民間の英語の4技能試験と同じ形式の教材を用いて授業等を行っているという状況が明らかになった。このように、民間の英語の4技能試験の対策を中心に行うようになることで、高校の英語の授業の画一性が生み出され、授業を行う教師やカリキュラム編成を行う高校の独自性が阻害される恐れがあるという点が改めて示唆される。

二点目に、特に英語4技能の指導・成績評価の困難さをどう克服していくかが課題となっている点が挙げられる。英語4技能の指導に関しては、文法や読解ができた上でスピーキング等にも対応できる生徒と、文法や読解がままならない生徒がいる場合に、一斉授業の中で英語4技能をどのように効率的あるいは公平に教えられるかという点が、また成績評価についても、特にスピーキングに関しては数値化が難しく、成績評価の客観性や公平性の担保が課題となっている点が本調査でも確認された。これまでの先行研究や報道等では、民間の英語の4技能試験や記述式問題自体の公平性に焦点が当てられてきたが、

特に英語の4技能試験導入に伴い、上記のような高校現場における授業方法・成績評価の公平性、客観性等がより求められるようになるという課題にも、一層注意を払っていく必要があるだろう。

三点目に、これまでの改革をめぐる議論では、民間の英語の4技能試験の活用に伴う受験機会の不平等や格差拡大等の問題点が一般的に指摘されてきたが、一部の高校にとってはそれらの活用が受験機会の拡大に繋がる側面もあることがX高校の事例から明らかとなった。一方、民間の英語の4技能試験と高校の英語の教育課程には乖離があると言われており<sup>7</sup>、受験機会の拡大というメリットのみを求めて民間試験の受験者が増えていけば、教育課程との整合性が問題になると考えられる。大学入試改革では、このような進学指導や高校生の受験行動の変化にも注目していく必要があるだろう。

四点目に、今回の共通試験改革の正当性・有効性に関する指摘である。今回の改革は高大接続改革の一環であり、改革を通じて高校教育も変えていくことが意図されている。特に英語教育に関しては、4技能試験を導入することで、それまでリーディングが重視されていた高校教育に例えばスピーキング重視のカリキュラムが入り、コミュニケーション力や表現力等が育成できるといった狙いがある。だが今回の調査対象校のように、改革前からそもそもスピーキング等にも力を入れたカリキュラムを実施していた場合には、変化があるとしても形式的な対応にとどまっていることが明らかになった。この点に鑑みれば、英語の4技能試験をわざわざ共通試験にまで導入するというコストをかけて高校教育を変えするという政策目的が、果たして正当あるいは有効であるのか疑問視される。すなわち、政策形成・決定過程で設定された政策の目的と、政策実施過程における結果に乖離が生じるという「実施のギャップ」(真淵 2000 61頁)が問題となりうるのである。このように、改革以前から英語4技能や記述式問題の指導を行っていた高校が、改革を受けて実際にいかなる対応を行っていたのかという状況を調査することも、改革の正当性や有効性を予め評価するために必要だと考えられる<sup>8</sup>。

最後に、本研究には、改革前から英語4技能や記



述式問題の指導を積極的に行っていた高校にインタビュー調査を実施したため、改革前にそのような指導を重視して行っていなかった高校の改革の受け止め方や、対応の仕方は解明できなかったという限界がある。従って、英語 4 技能や記述式問題の対策を重視していなかった高校も対象に含めて調査を継続していくことが、本研究の課題である。

## 註

- <sup>1</sup> 本稿での教育課程の定義は、田中による「子どもたちの成長と発達に必要な文化を組織した、全体的な計画とそれに基づく実践と評価を統合した営み」という定義に依拠している（田中 2011 12 頁）。
- <sup>2</sup> 北海道高等学校長協会調査研究部（2020）でも、共通テスト改革への対応に関する各高校へのアンケート調査を行った結果が報告されている。
- <sup>3</sup> なお、この他に『英語教育』2018 年 8 月号で、「変わる大学入試に備える高校の授業づくり」（9~33 頁）が特集されており、その中でも、高校教員らによる座談会や、授業の取り組みの事例紹介等が行われている。しかし、記述式問題に関してはふれられておらず、また、本稿のようにインタビュー調査に基づく分析が行われているわけではない。
- <sup>4</sup> ただし Z 高校では、大学入学共通テストにおける記述問題において学校で重視している「自分の意見を自由に表現する力」が評価されないことを懸念しているという。また、共通テストの対策用の問題集を購入し、生徒に取り組みせている。
- <sup>5</sup> なお、西（2019）においても、生徒からの声として、定期テストで「実用国語」が出題されたり、リスニングの読み上げ回数が 2 回から 1 回に変更されたりといった共通試験対策が行われていることが紹介されている。
- <sup>6</sup> なお、大学入学共通テストでは、リスニングの配点が、50 点からリーディングと同じ 100 点へと増やされる予定である。
- <sup>7</sup> 例えば南風原は「外国で開発された試験は日本の高等学校学習指導要領など一切参照していないだろうし、国内で開発された試験も、難易度が指導要領が想定している水準をはるかに超えているものも可とさ

れている」（南風原 2018 15 頁）と指摘している。  
<sup>8</sup> この点について、西も「データにもとづく高大接続改革が行われていたならば、共通テストに記述式問題を入れたり、英語民間試験を共通テストに組み込んだりする手法が採用されることはなかったかもしれない。政策のリソースをより効果的に使う高大接続改革が実現した可能性もある。重ねて強調したいのは、今後行われる検証は、高校現場の実態把握に基づくものであるべきだということである」と指摘している（西 2020 137 頁）。本研究により、以前から英語 4 技能や記述式問題に対応していたと認識していた高校では、共通試験改革によって教育課程に大幅な変化は生じていないという現場の実態の一端を明らかにできたといえる。

## 参考文献

- 阿部淳（2018）『『共通テスト』と『東北大学個別試験問題(前期)』に関する高校側の一考察』東北大学高度教養教育・学生支援機構〔編〕『個別大学の入試改革』東北大学出版会、115~135 頁
- 『英語教育』編集部〔編〕「第 1 特集 変わる大学入試に備える高校の授業づくり」『英語教育』2018 年 8 月号、9~33 頁
- 田中耕治（2011）「今なぜ『教育課程』なのか」田中耕治、水原克敏、三石初雄、西岡加名恵『新しい時代の教育課程』（第 3 版）、有斐閣、1~16 頁
- 西健太郎（2019）「共通テストは高校生の学びを変えるか」『月刊高校教育』2019 年 9 月号、48~51 頁
- 西健太郎（2020）「高等学校からみた高大接続改革—全国高校調査の結果から—」（2019 年度東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻大学経営・政策コース修士学位論文）
- 南風原朝和（2018）「英語入試改革の現状と共通テストのゆくえ」南風原朝和〔編著〕『検証 迷走する英語入試—スピーキング導入と民間委託』岩波書店、5~25 頁
- 秦野進一（2018）「大学入試で問われるべき英語力とは何か—資格・検定試験導入の持つ意味—」東北大学高度教養教育・学生支援機構〔編〕『個別大学の入試改革』東北大学出版会、163~182 頁

北海道高等学校長協会調査研究部〔編〕(2020)『研究報告書』北海道高等学校長協会調査研究部

真淵勝(2000)「課題設定・政策実施・政策評価」伊藤光利、田中愛治、真淵勝『政治過程論』有斐閣、54~76頁

宮本久也(2018)「高校から見た英語入試改革の問題点」南風原朝和〔編著〕『検証 迷走する英語入試—スピーキング導入と民間委託』岩波書店、26~40頁